見の遅れなどによって、初期消火が効果的にできなかったことです。電話の普及率がまだ低かった昭和二十年、三十年代当時は、やむを得なかったともいえそうですが、現在、ほとんどの家々に電話がある状況でも、適切な電話通報が少ないという実態を考えると、不意の災害に対しての心構えの大切さを痛感させられます。

これらのほかにも、水利の不備、消防力の劣勢などが要因に挙げられるでしょう。

四度の大火で

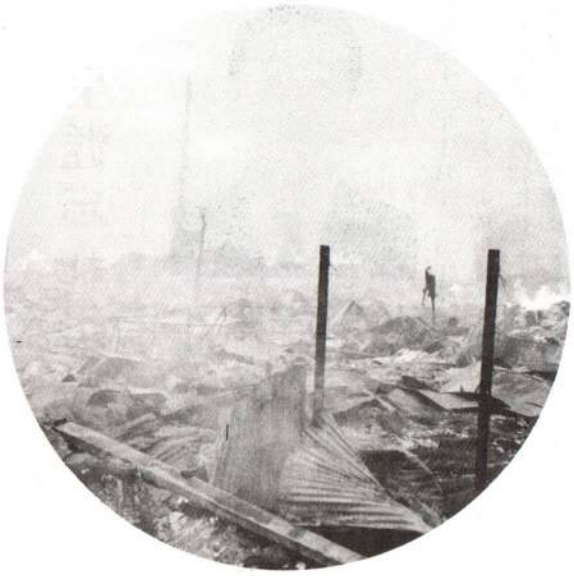
昭和二十八年、三十年、三十一年と、たて続けに起きた大火での焼失区域を同一地図上に重ねてみると、大館市街の三つの重要地域がスッポリ覆われてしまいます。一回目は市役所周辺の官庁街。二回目は市の玄関口大館駅を含む駅前市街地一帯。そして三度目は大館のメーンストリート、大町を中心とした商店街全域と東大館駅前にかけての一帯です。さらに四十三年には、御成町二丁目の商店街で大火が発生しました。

四度目の大火は、先の大火から十二年を経過していますが、教訓を生かして整備してきていた消防力でも、古い構造のままの街並みと密集地帯では、大火になるのを防ぎ切れなかったのです。

ただ、無傷で焼け残った不燃構造の建物が、その後の都市計画の方向と建造物のあり方を象徴的に暗示していたかのようです。

これらの大火後に、不燃都市を目指して取り組まれた火災復興の主な施策は、主要道拡幅と歩道の取り付け、さらに街路樹を植えること、袋小路の解消等交通網の再整備、防火帯を配置し周辺を防火構造の建物にすること、防火水槽増設や消火栓の設置、初期消火力強化のためにタンク車、ハシゴ車を導入することなどでした。また一方では、各町内で火災予防組合を発足（三十八年）したり、それを連合組織体（四十八年）にしたりと、以前は個々の防火意識に頼った形であったものをより拡大、充実させ、一層の防火思想の高揚が図られました。

火事を出さないためには、何よりもまず私たちの生活の中で〝火〟をおろそかにしないこと、気をゆるめないことが大切です。四度の大火のうち三回は休日、一回は土曜日のことでした。これはただ単に〝偶然〟とは言い切れないものを感じます。



焼け野原となった市街地

4度の大火による焼失地域

幕は閉じられた？

昭和五十年、六十年代に大火は起きていません。新しい街づくりと近代的装備の消防力の前に、大火の歴史は幕を閉じたのでしょうか。しかし、大火の導火線となり得る小さな火災はいまだに発生しており、住宅密集地、道路の狭い地域などがまだあります。そして現在、ガソリンなどの危険物の増加や消火作業を防げる不法駐車が多いことなど、新しい問題があることを忘れてはならないでしょう。

昭和31年8月18日
午後十一時四十五分ごろ東大館駅前から出火、市の中心街（商店街）等六百五十棟焼失、焼失世帯七百七十、十九日午前六時鎮火、風向南西、損害額約四十億二千万円。

昭和35年4月9日
水沢で二十一棟焼失

昭和37年5月7日
午後三時ごろ川口から出火、五十棟焼失、約三十分後に鎮火、風向南西、損害額約二千万円。

昭和37年6月16日
午後五時ごろ沼館から出火、三十六棟焼失、午後五時半鎮火、風向西、損害額約一千二百万円。

昭和42年5月3日
午後一時半ごろ田町から出火、十六棟を焼失、午後二時半鎮火、風向西、損害額約三千三百万円。

昭和43年10月12日
午前十一時十五分ごろ御成町二丁目から出火、二百七十棟焼失、罹災世帯二百四十八、午後二時半鎮火、風向西南西、損害額約十二億円。

※大館周辺広域市町村圏組合消防本部「大館市大火調」から。なお、損害額は大火当時の額です。